



絆～ほんとうに大
切なもの ⑤

<パブ版>

比良岡美紀
(2005、2007、2012)

目次

皆様へ	1
(2 2)	1
(2 3)	3
(2 4)	5
(2 5)	6
(2 6)	7
奥付	
奥付	10

皆様へ

『絆～ほんとうに大切なもの』パブー版 第5回です。

パーティーも終わり、俊彦たちは場所を移動します。

次の第6回もあわせて公開しますので、続けてお読みいただけましたら幸いです。

どうぞよろしくお願いいたします。

⑥はこちらから

①はこちらから

<https://puboo.jp/book/43673>

④はこちらから

<https://puboo.jp/book/46547>

(2 2)

パーティーは盛況だった。広い会場は人で一杯になり、あちこちから歓声が上がっていた。間もなく閉会となります、と司会が言い、しばらくして、〇〇先生にご挨拶を頂戴します、と声がした。

「さっきはすまん」

岸本は俊彦に言い、酒を注いだ。

「気にするな」

俊彦は岸本に返杯し、近況を話し合った。

「山岡のやつ、いまだに独身だって聞いたからさ」

岸本がつまみを食べながら言う。

「てっきり、川端さんのことが忘れられないんだと思って」

なるほど、そういうことか。

「だから一緒に実行委員やれてよかった、と……」

「そういうこと」

俊彦はうなずいて、注がれた酒を飲みほした。

「川端さん、松平さん、お疲れ様」

山岡が受付に姿を現した。首からカメラをさげている。

「あら、写真はもう終わり？」

山岡はうなずいた。パーティーの間、各テーブルを回って写真を撮っていたのだ。

「そうだ、川端さん」

名前を呼ばれ、依子は顔を上げた。

「さっき、大丈夫だった？ 怪我は？」

依子は首を横に振った。

「依子ったら嫌よね。何もなくて転ぶんだもの」

理恵を睨んだあと、山岡にほほ笑む。

「大丈夫。ありがとう」

そう言って、依子は何か思い出したようにうつむいた。頬が上気している。理恵が立ち上がり、山岡に目配せをした。山岡はうなずき、理恵とともに立ち去った。

しばらくして理恵が戻ってきた。一人だった。

「もう閉会ね。片付けるわよ」

依子はまだうつむいている。理恵はため息をついて、依子の背中を勢いよく叩いた。

依子は「ひゃあっ」と声を上げ、やめてよびっくりするじゃない、と抗議した。

「ぼうっとしてるのが悪いんじゃない。さあさあ、片付けの時間ですよ」

依子は立ち上がり、まったくもう、とつぶやきながら撤収準備を始めた。久美子と佳恵も加わり、片付けは存外にはかどった。

「じゃあまたおしゃべり会でね」理恵と依子は二人を見送った。

(2 3)

恩師による閉会の挨拶のあと、あらためて閉会の言葉があり、参加者は224名と発表された。卒業15周年の同窓会は毎年やっているが、今年はまれにみる盛況ということだった。

「もう終わりか。なんだか物足りないな」

俊彦が言うと、小西はうなずいた。

「二時間なんてあつという間だよな」

そう言うと、あらためて旧友たちに話しかけた。

「俺の知り合いが喫茶店始めたんだ。よかったら一緒に行かないか？」

「喫茶店？」

旧友の一人が言った。

「てことは、アルコールは無し、だよな？」

「なんだよ池田、お前まだ飲み足りないのか？」

俊彦が笑いながら言った。

「いや、言えば用意してもらえるはずだ。何が飲みたい？ 電話して頼んでやるよ」

「おお、小西くん、気がきくねえ。それじゃあ——」

あれだけ飲んでおいて、まだ飲むとは。呆れていると、山岡が話しかけてきた。

「ようトシちゃん、どうだった、パーティーは」

「すごい盛り上がりだったな。びっくりしたよ。こんなに人が集まるとはね」

「まあ、それは俺と松平さんのおかげだな」

そう言って山岡は笑った。

俊彦は、小西の知り合いがやっている喫茶店へ行かないかと尋ねた。山岡は少し考えるそぶりを見せたあと、行くと答えた。

「そうだな、片付けはほとんど終わっているし、皆とも話したいから」

よかった——。

「松平さんと川端さんにも声かけてくるよ」

「え？ あ、ああ」

冷静に言ったつもりだったが、やはり声が上ずっている。依子の華奢な肩の感触が、今でも両掌に残っていた。いったい、どう接すればいいのか——。俊彦は不安を隠せなかった。

しばらくして山岡が理恵と依子を連れて戻ってきた。俊彦は笑おうとしたが、頬にこわばりを感じられる。やはり緊張しているのだと、俊彦は落ち込んだ。一方の依子も、俊彦の顔を正面から見られずにいた。依子はそっと肩口に手を触れ、小さく深呼吸をした。

(2 4)

「皆さん、お久しぶり。小西くんがどこかい所に連れて行ってくれるんですって？」
理恵は学生のとときと変わらない明るい笑顔を振りまきながら、俊彦たちの輪の中に入った。

「おお松平さん、ちょうどいい所へ。一杯どうですか」

池田がビールを差し出す。

「ごめんなさい、私いま禁酒してるのよ」

「ええ？」と驚く男性陣。

「酔うと暴力的になっちゃうから」

その言葉に場の空気が凍りつく。

理恵は笑って言った。

「冗談よ。でも禁酒は本当なの。医者に止められてて」

凍りついた空気が、あっという間に和らいだ。それと同時に、男性陣が口々にしゃべり出す。

びっくりしたと言う者、松平さんは相変わらずだと言う者、最初から冗談と分かっていたと言う者……。

それらの声にまじり、依子が理恵に耳打ちした。

「ちょっと理恵、あなたお酒はからっきしダメなんじゃないの」

「いいじゃない。その方が断りやすいでしょ」

「もう、理恵ったら」

「川端さんも来るんだよね？」

その言葉に体をこわばらせた依子だったが、目の端で小西の姿をとらえると、ホッとしたような笑顔を見せた。

「え、ええ。喫茶店だっとうかがったけれど」

「うん、僕の知り合いがやあってね、近くに来たら寄ってくれて言われてたんだ」

「まあそうなの。楽しみだわ！」

俊彦と二人で話せるかもしれない、と依子は喜び、でも——と、すぐにその考えを打ち消す。この日を迎えるまでは、何かあるかもと期待した。いざ「何か」が起こってみると、激しい心の揺れを感じるのだった。いったい、どうしたら……。依子は自問したが、答えは出なかった。

(2 5)

喫茶店へ向かう道中、依子は、理恵、山岡、小西と並んで歩いていた。俊彦は別の友人たちと一緒にその後ろからついて行っている。依子たちの間から時折笑い声が聞こえ、話の内容が気になって仕方なかった。両隣の旧友たちは足元もおぼつかない状態で、しきりに議論をふっかけてくる。

俊彦は内心恨めしく思いながら、放っておけずに相手をしてやった。俊彦はかつて兄から、それがお前のいいところだ、と言われたが、自分ではそんな風には思えなかった。俺が毅然とした態度を取れば、こんなに絡んでくるはずはない。毅然と言おうとしているのに、いつも弱気になって……。ミチルにも言われたっけな。あなたはお人よし過ぎるのよ、って。まったく、なんでこんなことに……。などと考えながら歩いていると、いつのまにかお目当ての喫茶店に着いていた。理恵たちはすでに中に入っている。

「わあ、すごい、お洒落なところね」

「本当、素敵だわ。ねえ理恵、いつものおしゃべり会、ここでやらない？」

「いいわね、あとで久美子たちに連絡しておくわ」

「おしゃべり会、というのは？」

山岡が尋ねると、依子が少し恥ずかしそうに答えた。

「私たち四人で、月に何回か集まってどうでもいいおしゃべりをしているの。その場所にここを使わせてもらおうかなって。ね、理恵」

「そうなの。女四人寄ったら、かしましいなんてもんじゃないわよ～。山岡くん、興味あるならご招待するけど、いかが？」

「いや、けっこうです。遠慮しておきます」

山岡が言うと、どっと笑いが起こった。

足元がおぼつかなかった池田は、しばらく他の旧友たちと飲んでいたが、気がつくとき皆カウンターで寝てしまっていた。俊彦はマスターに薄手の毛布を出してもらおうと、それを全員にかけてやった。まったくしょうがないやつらだ、と口では言いながら、風邪をひくようなことがあってはいけないと、そう思ったのだった。マスターと笑顔で言葉を交わし、ひと仕事終わった俊彦は、テーブルに戻ると、依子のいる方に目をやった。

(2 6)

依子と理恵は、山岡、それにもう一人別の旧友と同じテーブルに座っている。俊彦は小西や岸本と一緒にいた。川端さんと話すには、外に誘ったほうがいいかな。俊彦は思い切って席を立つと、依子たちのテーブルへ移動した。

「川端さん」

依子はまっすぐに俊彦を見た。吸い込まれそうなその目に一瞬ひるみかけたが、勇気をふりしぼって言葉を続ける。

「よかったら、ちょっとお話し、できないかな。散歩でもしながら」

依子は内心、飛び上がりたくなるほど感激したが、心の揺れはまだ収まっておらず、戸惑いを隠せない。

「でも……」と下を向く。と、そのとき、理恵が山岡に目で合図した。

「ほんのちょっとでいいんだ。パーティーではあまり話せなかったから、そのお……」

その言葉は山岡に遮られた。

「おお、散歩か、いいなあ。俊彦、俺もちょうどタバコ吸いたかったんだ。散歩に行くな
ら俺も連れてってくれよ」

「なんだよ、俺は川端さんと話してるんだ」

「いいじゃないか、俊彦。俺も連れてってくれよ」

執拗に食い下がる山岡の言葉に、俊彦はハッとした。山岡が「俊彦」と呼ぶときは必ず
何か真剣な話があるときだ。これは付き合うしかない……。そう観念して、俊彦は山岡
と一緒に店を出て行った。

異様な雰囲気を感じ取ったのか、もう一人の旧友は別のテーブルに移動し、残っている
のは理恵と依子だけだった。理恵が依子にきつい口調で言う。

「ダメじゃない。ちゃんと断らなきゃ」

「だって、せっかく誘ってくれてるのに」

「そういう態度が誤解を招くのよ。まさか、何かあるかもなんて、期待してるんじゃない
でしょうね」

「わからない、あるかも……」

「何を言ってるのよ！ ご主人に愛されて幸せなのに、何が不満なの！？」

「愛されてるなんて、理恵に何が分かるのよ！ あの人は私のことなんてどうでもいいの。
そういう人なのよ」

奥付

奥付

絆～ほんとうに大切なもの パブー版⑤

<https://puboo.jp/book/46552>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/46552>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46552>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版⑤

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
